

京の脱徂徠学派 宇野明霞

高橋博巳

序

荻生徂徠（一六六六—一七二八）が古文辞を唱導して十年、影響は全国に及んだが、ひとり京洛からはその門を叩く者がなかった。

かねてそのことを気にしていた徂徠を殊の外喜ばせたのは、明霞宇野士新（一六九八—一七四五）と士朗（一七〇一—一七三二）の兄弟である。兄士新は名は鼎、小字は三平、明霞軒と号し、家業の運漕業を厭って、弟士朗、名は鑑、もとの字は士茹、小字は兵介とともに、「吾が家世よ什一を逐ふ。故に兄弟始めて学ぶとき父祖の素有ること無し。且た人に非とせらる」（『士朗遺稿を録する序』、『明霞先生遺稿』巻六）というような不利な条件のもとで儒学を攻究し、「余、先生と相知ること十年、時を論じ事を談じ、肺肝を隠すこと莫し」（『向先生を祭る文』、同上巻八）という向井滄洲（一六六六—一七三二）の如き人物が周りにいなかったわけではないが、「士朗遺稿を録する序」には続けて「是の時に当たariate 適たま物夫子の武中に興ると聞きて、心之れに郷往す。都下朝夕する所無きときには、又師友の助け無く、或は衆に怪しまる。独だ二人相依倚す」と述べてもいるように、伊藤仁斎（一六二七—一七〇五）・

東涯（一六七〇—一七三六）父子の古義学の牙城で護國古文辞学を唱えるも、やがて一転して徂徠学の批判者となり、その道の半ばで倒れた儒者である。次章で見えるように護國社中の大方に挙げて歓迎・誘掖されながらも、この兄弟は敢えて徂徠学派に反噬することを辞さなかった。享保年間に京都で逸早く徂徠学を標榜し、爾来徂徠その人への尊敬は変わらぬまま、程なく徂徠学に対して叛旗を翻すに至ったのは何故か。徂徠学の京都への導入と否定を、さして長いとも言えぬ生涯において敢行した理由が明らかにれば、小論の目的は達せられたとしなければならぬが、併せて十八世紀前半の京都の精神風土の一面をもせめて粗描したいという蜀を望む気持も打消し難い。

一

徂徠学の流行の様態を鮮やかに描いて見せたのは那波魯堂（一七二七—一八九）の『学問源流』である。それによれば、徂徠学は享保初年には江戸で専ら行われ、「京都ニハ東涯ノ学盛ニシテ、徂徠ノ学ハ新奇ノ説ナリト云人ハアレドモ学ブ人ハ甚少ナ」かったが、その後次第に増えて、「京都ニテ至テ盛シニ有シハ、徂徠没シテ後、

元文ノ初年ヨリ延享・寛延ノ比マデ十二・三年ノ間ヲ甚シトス。世ノ人其説ヲ喜ンデ習フコト信ニ狂スルガ如クであつたといふ⁽²⁾。元文元年（一七三六）には伊藤東涯が六七歳で没しており、このころから寛延末年（一七五〇）までが京の徂徠学流行の最盛期とすれば、明霞の徂徠学への接近が周囲に先んじた荆棘の多いものであり、更にまた徂徠学からの離反が流行の真只中で敢行されたことがわかる。

『閑散余録』の伝えるところによれば、

平介ガ徂徠ヘ入門ノワケハ、三平兄弟カネテヨリ入江若水ト親シ。（中略）アル年、若水獄訟ノ事有テ、江戸ニ之テ官ニ訴フ。故ニ暫ク江戸ニ寓ス。ソノ頃徂徠門ヲ開テ復古ヲ唱フ。因テ若水モ介紹ヲ求メテ謁見セリ。帰郷ノ後三平ニ逢テ、コレヲ語リ、且告ルニ徂徠ノ門風ヲ以テス。三平大ニ悦ビ、其身ハ多病ニシテ遠遊シ難キヲ以テ、平介ニ若水ガ書翰ヲソヘテ、江戸ニ至ラシムルトナリ。⁽³⁾

という次第で、宇野兄弟の徂徠学への関心が入江若水（一六七一一七二九）によって惹き起こされたものであることが知られる。このことは徂徠と若水の関係と併せて、日野龍夫氏の「入江若水伝資料」に詳しいが、そこに引かれた南郭の若水宛て書簡に「蓋し吾が徂徠翁の斯文に主盟せしより、独り京畿の間に於て隠然として吾が党に干城たる者は子か」（『南郭文集』初編卷九）⁽⁴⁾と見えるのが、護園における若水の位置をよく示している。この若水の紹介で、士朗は享保九年（一七二四）「糧を千里に裹み」（「于士茹に報ず」、『南郭文集』初編卷十）護園に遊んで、そのメンパーをして「賈生

復た洛に生ず」（「于季子に贈る序」、『徂徠集』卷十）⁽⁵⁾と言わしめ、翌享保十年に帰京している。山県周南（一六八七—一七五二）によれば、士朗は帰京に際して「業已に規矩を受く。乃ち其の分数の若きは、則ち鑑や請ふ自ら試みん」（「于士茹を送る序」、『周南文集』卷五）⁽⁷⁾とその抱負を語っているのが注目される。

無論、南郭・金華等の周旋によつて宇野兄弟はその後も護園グループの人々と交流することができた。南郭は在京の玄海に宛てて、乃者于生兄弟を知る。京人なり。夙已に我が赤城に興起す。則ち亦た皆な矯矯として人に下らず。小于是客歳東遊して社盟に与かることを得。其の志を叩けば則ち謂はゆる文王無きと雖も猶は興る者なり。乃ち已に五月（享保十年—注）を以て帰らぬ。大于是則ち音を寄せて以て歓す。已に一たび面を見る者の若し。京師王化、人無しと言ふ可からざることは是の如し。近ごろ于生に報ずる書に頗る師の事に及ぶ。師の京に淹しきが為に願はくは一たび周旋せよ。庶幾くは与に語る可し。（玄海師に報ず」、『南郭文集』初編卷十）

と書き送っている。京にあっては玄海のほかにも、また大潮（一六七六一一七六八）について詩と唐音を学んだこと、夙に石崎又造氏の『支那俗語文学史』に説述がある⁽⁸⁾。

明霞はこうして「新奇ノ説」を学び、かつ批判したというばかりでなく、またその詩に「杜門 所好に従へば、人事 自違ふこと多し」（「感有り」、『明霞遺稿』卷二）というように、世人これを「閉戸先生」と称し、弟子の大典（一七一九—一八〇一）も「維れ昔宇夫子、世を挙げて狂狷と目す」（「片孝秩に贈る」、『小雲棲稿』

卷一⁽⁹⁾と詠んでいる如く、自他ともに世間と反りの合わない性格を認めていたように見える。「狂狷」とは無論「狂者は進み取る。狷者は為さざる所有なるなり」(『論語』子路篇)を踏まえており、「進取」すなわち徂徠学の摂取および批判と、「不為」すなわち一種の非社会性との組み合わせが、却って人を惹き付ける遠因ともなつたであらう。

二

宇野兄弟の徂徠学への接近は、土朗が「蓋し余と吾が兄と始めて学ぶときは、物先生の『文戒』を得て之れを読み、得ること有る者の若し」(『彈金華稿刪の後に題す』、『名公四序評』所収⁽¹⁰⁾)というように、主として文章への関心に端を発するものようだ。土朗が「杉以成に与ふる書」において、

世俗の儒は唯だ倭訓之れ守り、復た文の華物爲るを知らず。物子は則ち之れを正す、一なり。文は唯だ欧蘇に奴隸して議論是れ務む。物子は則ち李王古文辞を倡ふ、二なり。詩は唯だ宋元の余、或は唐を称すと雖も大曆に上らず。物子は則ち盛唐若しくは李王を称す、三なり。伊仁齋・僧玄光の属も亦た当時の能文なる者にして尚倭病有るを免れず。而るに人未だ之れ識らず。物子は則ち之れを斥け以て戒を爲す、四なり。仁齋は古学を倡へ其の説は一に程朱斯れ廢するに出づ。物子は則ち程朱を挙げて以て其の弊を救ふ、五なり。(『宇士朗遺稿』卷五⁽¹¹⁾)

というのを見れば、兄弟のかかる徂徠学評論が『訳文笺蹄』や『讀園隨筆』段階の主張に副うものであることは明白だが、同じ書簡の

中で更に「物子も始めは亦た文人として自ら居る。蓋し宋学に疑ひ有りて、未だ其の解を得ず、経術を以て自ら居ることを欲せざるなり。晩節に乃ち経術を以て自負するは、得る所有なるなり。夫れ其の文辞を以てするのみも亦た既に偉なり。況んや合するに経術を以てするをや」と述べているのは、その後の「文辞」から「経術」への徂徠学における力点の移動を押さえたもので、徂徠学をトータルに把握していたことを示している。

いま兄弟の学問が「文辞」への関心によって始まった点に注目すれば、先ず取り上げるべきは、清田儋叟によって「宇士新ノ訓点ハ樊紹述ガ文、解大神ガ書ニ同ジ」(『芸苑譜』⁽¹²⁾)と評された訓読の仕方であらう。この方面での明霞の仕事は後に大典によって受け継がれ『詩語解』・『文語解』として集成されるが、「詩語解題引」では、

夫れ物に形有り、心有りて后に声有り。声有りて后に音生ず。音生じて后に義成る。義成りて后に字形はる。字は人⁽¹³⁾なり、音は天なり。故に字義を明さんと欲せば必ず音を本と爲す。と説かれており、「文語解凡例」には、

今ノ字イマト云ヨリシテ発端ノ辞トナリ、又転ジテモシノ義トナル⁽¹⁴⁾。今有璞ニ玉於此ノ類ハモシイマノ義トナレドモ。今有少卒暴⁽¹⁵⁾起⁽¹⁶⁾ノ類ハモシノ義ノミニシテ、イマノ意ハナシ。凡字義ノ展転スルコト多クコノ類ニシテ字書訓詁ノツクス所ニ非ズ。学者旧来ノ倭読ニ泥テ義意ニクラキコト多シ。士新ノ訳法アニ千古ノ発明ナラズヤ⁽¹⁷⁾。

と述べられている。この「訳を以て訓点と」(清田儋叟『芸苑談』⁽¹³⁾)

する行き方は言うまでもなく『訳文奎蹄初編』で、

先づ崎陽之字を為し、教ふるに俗語を以てし、誦するに華音を以てし、訳するに此の方の俚語を以てして、絶して和訓廻環の読みを作さしめず。

と説いた但徠の主張の延長線上にある。但徠はしかし直ちに後退して、「此の方の説法」によつて「俚言」で解説するという次善の方法を提示しているが、これこそまさに明霞の採用した「訳法」でもあったと言ふことができるだろう。

兄弟に影響を与えた「文戒」は正徳四年（一七一四）入江若水の周旋によつて出刊を見た⁽¹⁷⁾『護國隨筆』巻五に付録として載せられた「但徠先生口語」である。そこでも「文章」は「中華の人の語言」であり、それを書くためには「和字」・「和句」・「和習」を避けるべきことが実例を挙げて説明され、問題は「和訓転倒の説」に存すると説かれている。この説を字野兄弟がどう受けとめたかについては、先引の大典の文章からも推測できるが、更に次の士朗の文章について見ることにしよう。「音を論ず」と題された文章で、士朗は、夫れ字に形有り、音有り。手の画く所にして目の睹る所は是れ形なり。口の出だす所にして耳の受くる所は是れ音なり。二者備はり、然る後に其の義在り。（『士朗遺稿』巻四）

大典の解説に比べれば素朴ながら、士朗はここで「字」を「形」と「音」との二面から捉えて「義」を理解しようとする。「形」と「音」は切り離せず、「音通する者は其の義も亦た通ず。音近き者は其の義も亦た近し。辞に軽重・緩急有り、音に由らざる莫し」（同上）として、「四声・五音・清濁・軽重」に言及し、日本語と

の違いを強調する。そして続けて、

今、書を覽る者、唯だ其の形を睹て其の音を知らず、徒だ倭読を事とす。倭読は読に非ざるなり。訳の不当、影響の間に在る者のみ。（同上）

という。「字は華物」であるから「倭読」することはできない。しかも「音」さえわかれば書を解し、文が作れるかという、必ずしもそうではない。読書の際に「口は下誦すると雖も、目或は上視」ということもあるからである。それでは音を習うのは無益かといえば無論そうではなく、

盖し読書の法、目以て心に処り、口以て字を歩ませ、力を用ふるは目に在り、習ふ所は口に在り。然る後、華に全きを得るなり。（同上）

と士朗はいい、「心目」と「口舌」の双方を重視して、特に「音」に「熟習」することを説いて「華音は正路」であり、「倭読は捷徑」であることを力説する。これは明らかに但徠が『訳文奎蹄初編』で「書を読むは書を見るに如かず」として「耳口」は設置き、万国共通の「一双の眼」でもって、或いは「心と目」で「義趣の外に、別に一種の氣象」まで読み取ろうとするのを、これはやはり「字」の「形」だけを見ることではないかと批判するものであろう。

かかる「音」重視はまた明霞においても、「夏音行 重ねて文意に贈す」（『明霞遺稿』巻一）に認められる。そこで明霞は、

東海忽ち興る物夫子

先覺沈約と比するに堪ふ

楚人自^なお愛す許行が言

空しく田生をして此に望せしむ

というのを自ら註して「国初に惺窩藤先生有り。是れ自り以来、文学日に興り、而も皆夏音を事とせず。物先生始めて其の非を知る。沈約が音を知る者に似ること有り」と記し、更に、

田生や是れ一邦彦

字子に結交して徒だ狂狷

共に知る物子は天下の賢

咫尺相慕ひて相見はず

泰顔梁壤 心肝摧く

把袂仰ぎ看る浮雲の変ずるを

と詠じている。「田生文瑟」とは田中大観（一七一〇—一三五）のことで、「田文瑟墓偏銘」（『明霞遺稿』巻八）には「君の学に於ける師承する所無く、意一世を不可とし、独り三河の物茂卿先生を慕ふ」という一条が見えるほか、父由真の門人・中根元圭（一六六二—一七三三）⁽¹⁹⁾について算術と天文に通じ、また「稍に呉音を操し、頗る俗語を解し、博く近世の小説を覽て其の小説を訳する、当代比莫し。（中略）経伝字句に至るも亦た発明する所有り」（同上）というように、多彩な活動で短い生涯を飾った印象的な人物であるが、彼の名はまた『名公四序評』⁽²⁰⁾の中に明霞と並んで「友人田瓚補」として見出すことができる。

三

「雌黄の癖」（「田文瑟に復する書」、『明霞遺稿』巻八）が嵩じて病膏肓に入った観のある田中大観と明霞は但徠はともかくとして

南郭以下の護園社中の文章の乱れを看過し得ず、享保十一—三年「彈金華稿刪」を、続いて「名公四序評」（享保十五—六年序）を執筆して、但徠学派批判の口火を切った。明霞によれば、

始め物子、文章を倡へ循々と人を誘ひ終日倦まず。士朗の從遊するに及ぶ比は則ち大に然らず。苟し操觚屬辭すれば輒ち其の業を許し復た規す所無し。蓋し始倡の時、夷夏を弁じ、雅俗を別ち、今古を論じ、以て之れを論す。已にして其の人多く業を成さず。乃ち黙して言はず。其の心に謂へらく、齷齪と弁斥すれば彼が志氣を沮む、其の業漸に進めば自らに其の非を知らん、不言の教へ才を育するに庶幾すと。（前掲「田文瑟に復する書」）

という次第で、但徠が最後に『学則』を著わしたのも「蓋し二三子の益を求めざるを知り、近きを棄てて遠きに教ふる」（同上）ためであつたとさえる。但徠学の草創期に採られていた教育方針は中途で変更され、そのために平野金華（一六八八—一七三三）のような詩を別にすれば文章は範とするに足りない人の文集が編まれ、「後生少年」輩を誤らせるような虞が出てきた。明霞はいう。

余、子和（金華）の文を觀るに、倭字有り、倭句有り、倭氣有り、古を用ひて毎に繆り、自運妄多し。叙事に法無く或は辭を得ず。持論當らず、又定見無し。（「附彈金華稿刪」巻首）

しかし但徠に対しては、例えば「土伯睥を送る序」（『但徠集』では卷十一所収）について、「韓柳も極づる色有り、況して後人をや。」（『名公四序評』）と絶賛し、大観も同様に「物子の文は華夏と雖も其の比を難んず。一二の疵累は古の作者と雖も之れ有り。蓋

し一時偶たま誤るのみ。服・平諸子の若きは則ち知らずして之れを為す者、日を同じうして談ず可からざるなり」(同上)と評して、徂徠とその門下たちとを峻別した。士朗もまた『名公四序評』に序している。

物夫子、蓋し恒言有りて曰はく、大なる者を立つれば、小なる者之れに従ひ、大なる者は大生し、小なる者は小生すと。則ち夫の二三子に於て、牽かず、抑へず、以て其の生を俟つ者のみ。鑑、嘗て夫子に待す。夫子曰はく、学は必ず三備して三成す。経術なり、政事なり、文辞なり。若し岐して以て三と為して、其の一を去るときは、成る所無きなりと。乃ち夫の二三子、独り其の文辞のみを以てするときは、夫子の言或は未だ之れ聞かざるなり。大なる者且つ未だしなり、何ぞ小なる者に於て有らんや。(中略)茲の評や、以て物夫子の志を弁ずるなり。以て党せざるを示すなり。

この文章は京で徂徠学が盛行する数年前の享保十五・六年に執筆された士朗のいわば白鳥の歌である。ここで士朗は、徂徠の「先づ其の大なる者を立つれば、小なる者自から至る」(『弁道』²¹)というスローガンに疑問を投げかけていると言つてよいだろう。しかも「学」は「経術」・「政事」・「文辞」のいづれを欠いても成り立ち難いとしながら、現実には「文辞」の徒のみを周囲に集め、「大なる者」はおろか「小なる者」さえ立ち難い状況にある。徂徠は人材を養成しようとして、「服・平二子」の如き不完全な文人を育てたということになろう。かくて「物夫子の志を弁ずる」作業は、もはや「文辞」のみに対象を限定することができない。

四

享保十年(一七二五)江戸を発つに当たつて、士朗が「業已に規矩を受く。乃ち其の分数の若きは則ち鑑や請ふ自ら試みん」(前引)と言ひ放つたことについては先に触れた。「分数」は「自ら試み」ようという言い方には、既に当時の徂徠学派に対する不満の意が表明されていたのではなからうか。帰京後間もなく平野金華より「乃ち聞く、足下既已に奮然として其の職を樹て、時々同人と経国の事を講ずと。愉快何ぞ極まらん」(「于士茹に復する書」、『金華稿冊』²²卷五)という手紙が届いた返事に、士朗が次のように答えているところを見ると、先の推測もあながち見当違いではないだろう。

足下聞く、僕の職を洛下に建て以て告ぐといふは、過までり。僕、窮居の門に雌伏し履跡無し。然れども敢えて来者を拒むに非ずして、交遊自ら疎なり。唯だ僕の罷驚、勉勵懈らずと雖も未だ樹立する所有らず。自ら視ること欽然たらば則ち人の知る莫きは固より其の所なり。凡そ僕の務むるは外に在らずして内に在り。而して其の世に知らるるを俟つは今日に在らずして異日に在り。亦た何ぞ職を之れ建てんや。(『平子和に与ふる書』第二、『宇士朗遺稿』卷五)

これによれば、先の伝聞を否定しながらも、その実「僕の務むるは外に在らずして内に在り」と宣言し、更に「世に知らるるを」将来に期するなど、むしろ並々ならぬ抱負を語っているかに見える。

のみならず徂徠宛て第二書簡には「徒らに秦漢を慕称して剽句摘字、沾々として自ら喜ぶ者は、則ち鑑や亦た為すことを欲せざるの

み」(『宇土朗遺稿』卷五)という一節が見える。「経国の事」については今詳らかにしがたいが、「秦漢」古文辞については『明霞遺稿』に説が備わる。往々にして見受けられる古文辞イコール模擬剽窃という安易な態度を斥けていう。

夫れ辞の尚ふ可きは古に在りて古人自らに其の意を述す。意の達する所は我に在りて、後世辞を作ることを得ず。古の用ふ可き者は辞にして、後世は辞無し。(中略)模擬の至りは古と徒と為り、古に役せられず、変化之れ得たるなり。心の欲ふ所に従ふとも矩を踰えず。変化未だ模擬せざることあらず、模擬未だ変化せざることあらず。変化して神正し、模擬して格存す。古辞涯有りて吾が意涯無し。涯有るを以て、涯無きに随へば窮するなり。辞は涯有りて法は則涯無し。涯無きを以て涯無きに随ふ。然る後、古文窮すること無し。(「林君実を送する序」、卷六)

ここで明霞は「模擬剽窃」と古文辞本来の「擬議変化」を区別する。但徠にあつて見易い例として詩論を引けば、『訳文奎蹄初編』巻首にもいうように、詩において重要なのは「意味」ではなくて「語言」であり、「唐詩の語」を「分類抄出してその「語言」を用いて詩を組み立てることを奨めている。殊に初心者に対してはその傾向が強く、南郭が「驚湖侯に答ふ」(『南郭文集』四編卷十)において、昔人有り。自ら詩格の覚えず卑に墮つるを患ふる者に、物子之れに教ふるに調に依りて思を構へ、辞を得て篇を作すことを以てす。先づ盛唐諸名家の合作句調に闇熟して、而して後此の事に習ふのみ。必ずしも先に意を立てず。一唯に古人に似んこと

を求む。此れ亦た一道なり。

という如くである。しかし同じ書簡で南郭は、

夫れ詩は題に臨みて意を命じ、興に就きて辞を得るは固よりなり。而して又調を以て辞を得、辞に従ひて意を得る者有り。但だ先に意を設けざれば、則ち体も亦た立ち難く、往往佳句有りと雖も主意實せず、前後偏墜、一篇を成し難し。

とも述べているように、但徠ほど「語言」に重きを置かず、「辞」と「意」のバランスを巧みにとっていたようだ。それは早く「島婦徳に与ふ」(『南郭文集』初編卷十)において、「詩は蓋し事に即き興に感ず」と明言し、更に、

蓋し僕の志は以為へらく擬倣の作は実に其の人を奪ひて僅かに為す可きなり。然らずんば少しく避けんのみ。(同上)

と言ひ副えているのを見れば、南郭には一貫した態度であつたのであろう。

いま右に見た例を借りて、明霞のいう「模擬剽窃」と「擬議変化」の違いを見てゆきたい。明霞によれば「辞」は「古」に在つて「後世」にはない。一方「意」は外でもなく「我」に在る。「古」の「辞」を用いて「後世」の「我」の「意」を表現するにはどうすればよいか。これが明霞の問題であり、既に詩において南郭が解決した問題を、明霞は文章において解こうとしたのだと言える。そのために明霞は「模擬」と「変化」を均衡させ、「古辞涯有りて吾が意涯無し」という不等式を「法」と「意」の等式に変えようとする。古文辞に批判的な太宰春台(一六八〇—一七四七)も「古文辞家徒だ古辞を挾ぶことを知りて、古法を知らず」(「李于麟の文を

読む」、『紫芝園後稿』卷十⁽²³⁾)と指摘しているが、明霞はまさにその「法」によって「古辞」の活用を図り、有限の「古辞」を無限の「意」に対応させようとした点に、脱徂徠学派の面目を認めることができるだろう。

そして大典によれば、

夫れ心は言に由りて顯はれ、言は文に由りて伝はる。故に文の用は言ふ所を言ひ、叙る所を叙るに在り。今の文を学ぶ者、伎を唐宋に騁せ、歩を秦漢に学ぶと曰ふと雖も、其の日用の事態、言ふ所を言ひ叙る所を叙るにおいて、文、意に因りて転ずること能はず。筆、物に随ひて運ぶこと能はず。是の若くして何ぞ文を用ひん。此れ他無し。脚、実を蹠まず、徒らに虚に馮らんと欲す。未だ海を越えて西すること能はず。何ぞ唐宋と秦漢及に溯ることを論ぜんや。(『藤秋卿に与ふ』、『小雲棲稿』

卷十一)

という。明霞の学統を継いだ大典が文章を論じて「意」や「物」を重視し、「実」に即こうとしているのは、まだ見たこともない中国の「唐宋秦漢」の範例よりも、日本の現実を文章に盛る工夫が先行していたことを示している。ところで、このように「文、意に因りて転じ、筆、物に随ひて運ぶ」文章が必ずしも儒者として携わるべき「経術・政事」ばかりを対象にしないであろうことは容易に察せられる。その点で春台が「対客論文」(『紫芝園後稿』卷十五)において明霞を完膚なきまでに批判し、

凡そ文章の教は君子に施す所以なり。平安儒先、乃ち斯道を以て小人に訓へんと欲するは過てり。意者^{おもふに}三平も亦た是の習ひに

坐するのみ。

と述べて、仁齋以来の京の伝統の中に明霞をも位置付けているが、我々はいまや「小人」の儒学こそ注目すべきであろうと思われる。頼惟勤氏によれば、明霞門の片山北海(一七三三—九〇)の主宰した混沌社における北海の態度は「師道を以て自ら居らず、從遊の士はみな朋友これ待す」(頼春水『師友志』)というもので、遡って明霞の塾においても同様であったという。明霞の開かれた精神は、京の土壌に移植された徂徠学が咲かせた新しい花である。

五

「小人」の儒学とは何か。士朗は初め、兄弟の「凍餒」を見るに見兼ねた入江若水に「医と為り、以て生産を治」めることを勧められたが、「医は小技」であるとしてそれを断わり、「志」を述べていう。今時「経術」が世の役に立とうとは思われないが、幸い父母を養う長男がいるので、明霞と士朗は安んじて「好む所に従ひ、以て大業に就けば、則ち三牲の養を用ふる能はずと雖も、亦た以て後世に称さるに足る。是れ所謂る孝の終なる者に非ずや」(以上「江子傲に与ふる書」、『宇士朗遺稿』卷五)と。士朗はまた「友人某に報ず」(同上)において「盖し余の父祖故買人なり。夫れ買人は不廉を以て家を成し、亦た不廉を以て業を破る。余兄弟、其の家に生長して其の是くの如きを賤しむや、以為へらく寧ろ死するも買人と為らずと。乃ち志を立て業を執り、以て此に及ぶ。即ち未だ一家を成し得ずと雖も、業に君子の林に列し、然り而して人の我を待つこと敢えて買人を以てする莫きは、則ち以て初志に酬ゆるに足

れり」とも述べている。これらを見ると、「不廉」ゆえに「賈人を賤しむ」というのが「吾が業の由りて立つ所」(同上)であり、「賈人」の裏返しとしての「君子」が彼らの理想であつたことが理解される。従つて経世済民よりも、自己にかかるものとして形成することが先決問題となる。

このような問題に対して、徂徠学がいかにも無力であるかは縷説を要しない。「橘時中に答る書」(『明霞遺稿』卷八)には、当今の儒者を批判して、彼らは「我れ能く聖人の道を行ふ。我れ能く秦漢の文を属す。我れ能く盛唐の詩を賦す」といひながら「退きて其の私を省れば、乃ち一時の惡少年、曾て時俗の行にも及ばず。夫れ身は今の俗に染みて、口は古の道を揚ぐ、固より君子の恥づる所」古文辭の詩文が書けたところで何にならう、「亦た時俗の民ならずや」という。しかも、そのような状況に立ち至つた理由として、徂徠の教育が指彈さるべきものであること、次に引く『論語考』卷六の雍也篇「子華、齊に使す」の条の釈義の末尾に、

夫れ天下を治むる、礼に非ざる則は法、法家未だ非ならず。

士、学を為すに礼案に非ざる則は理、理學未だ非ならず。明三百年、法と理學とを以て治を為し、其の国容見る可し。日本、古文辭の学有りて學者多く放蕩。物子の門人、其の教に従はず、抑も亦た故有るなり。⁶⁶⁾

と書き副えられているのを見るまでもなく明らかである。明霞は、「礼案」は既に失われて抛り所のないものであり、それに比べれば「理」や「法」のほうがまだしも役に立つと考えており、「古文辭」と「放蕩」との間に因果關係を認めている。

方今、不佞が見る處は則ち物子に同じからずして、足下に同じ。(『林君実に答する書』第二、『明霞遺稿』卷八)

と記した書簡には、また京の儒学界の次のような描写がある。足下洛に在る者を見ずや。人に常交無く書に常読無し。抗願して師に居る者、肆を開きて以て人を招く則には繆恭として弟子と称する者、笈を負ひて龍断に上り、終歳東西に奔走するのみ。吾れ此の輩と事を共にするを恥ぢて交遊寡小、焉んぞ都下に居るに在らん。

「君子」の儒者を目指す明霞にとって、周囲の儒者たちが「時俗の民」と選ぶ所がないとすれば、「交遊寡小」たらざるを得ず、明霞の孤立は必然である。

「書齋常に寂寞たり」に始まる明霞の「秋日の作十首」(『明霞遺稿』卷一)には、「弱冠壯遊の志、年々病を如何ん」(其四)とあつて、東遊の希望も病氣ゆえに叶わず、「玩世は吾れ何ぞ敢えてせん、病羸自門を杜づ」(其六)、「閨閨長く落魄、兄弟共に沈淪」(其八)、「乾坤一病夫、性僻にして事還た迂なり、経術は多く衆に違ひ、文章自ら隅に向ふ、青雲路の絶ゆるに従せども、黄土名の蕪せんことを恐る、相見る風塵の色、微躬幸に未だ駆せず」(其十)と京の片隅に病身を寄せている様が詠まれており、また以上の結果として、「寧ろ論ぜん当世の事、唯見る古人の情」(「感有り」其四、同上卷二)の一句が見える。青雲の志もなかったわけではないが、非社交性は徹底していて、周南門下の滝鶴台(一七〇九—一七三三)でさえ、享保十七年(一七三三)の上京の際に門人芥川丹丘(一七一〇—一八五)を介しても明霞との面会が叶わぬことを南郭に報じてい

るほどである（南郭宛て第一書簡、『鶴台遺稿』卷八⁽²⁷⁾）。「君子」の

儒者たろうとして孤立化を深めるほどに、経世済民の儒者からは「小人」の振舞いとして見られたであろう。かくて意識はどうあれ、外貌は文人の観を呈しても来、例えば「茗を煮る歌」（『明霞遺稿』卷一）には「衡門客去りて秋夜長く、紅爐に茗を煮て清香を愛す。（中略）独坐自ら斟み還た自ら飲む、飲み罷りて猶ほ自ら遺芳を玩す、忘却す心中不平の事、五更の燈火空堂に對す」というような清閑の句が見える。またある時には亮茶翁高遊外（一六七五—一七六三）の訪問を受ける。大典の『昨非集』巻下によれば、「亮茶翁茶具を携へて士新先生を訪ひ、茶を煎て之れに飲しむ。余も亦た焉れに与る」として詩二首を明霞に贈っている。明霞はそれを「九日陶家酒を載せ来りしに、僧を携へ茗を煮て席上開く」という詩句で受け、更に「茶味芬芳爽氣を添へ、詩篇慷慨清風を起す、旧痾暫く塵外に遊ぶことを得れば、高臥何ぞ妨げん市中に在るを」（『明霞遺稿』卷五）と詠っており、精神を伸張させている様子がうかがわれる。また大典が「必端堂研譜の序」（『北禅文章』卷一）で「昔者、宇先生研僻有り。居貧にして力を致すこと能はず。亦た未だ識らざる所多し。今譜に載する所、恨らくは先生をして之れを觀せしめず」と付言しているように、明霞は所謂文房趣味も有していた。清田儼叟による「宇士新、物数奇ノ筆牀、形頗ル宜シ」（『芸苑譜』）とのコメントもある。喫茶や文具への関心は、明霞の非社会性を変えるものではないが、少数の人々と楽しみを頒ち合うのを妨げるものではなかった。

跋

大典の「瘞書の銘」（『小雲棲稿』卷九）には、「宇野士新、亡するに臨みて、其の門に人無きを以て、余をして其の遺業を修せしむ」という。それによれば大典は遺稿を整理して十数巻となし、散逸を恐れて「北山金剛の傍に」明和九年（一七七二）、奇しくも二十七年前、明霞を葬った同じ日の四月十九日に埋めて「碣を立て表」したという。そして「抑も士新一生の心力、筆研に竭す。則ち其の遺靈殆ど此に在りて、彼に在らざるなり」と付け加えている。また明霞の著述は、『詩語解』・『文語解』補訂のほか、『明霞遺稿』八巻・未完の主著『論語考』六巻（ただし大典の係わったのは三巻まで）・『左伝考』三巻など、大典の尽力によって刊行されたものが少なくない。そのうち殊に『論語考』に見られる激越な徂徠学批判によつて『護國雜誌』には「宇士新は學術の奇僻なるのみならず言行ともに詭激なり⁽³⁰⁾」と評されるが、幾分かの実実を含みつつも一面の觀察たるを免れない。

小論は明霞と士朗の著述を点綴しながら徂徠学との距離を測ってきたが、かく見來たつて判然とするのは、兄弟の徂徠学受容が「大なる者」は扱措き、「小なる者」を中心とした作業で一貫していることである。その点で爾後の思想史の流れを予顯させてもいるのであるが、やがて明和元年（一七六四）皆川淇園（一七三四—一八〇七）が学問の方法を論じて「然らば則ち学は易事を先にするや。曰はく、勉めて其の小なる者と常ある者とを思へ」（『学を論ず』、『淇園文集』初編卷一⁽³¹⁾）と述べるに及んで、改めて明霞の存在がクロ

ズアップされるのである。

註

- (1) 寛延元年刊本。
- (2) 寛政十一年刊本。
- (3) 「日本隨筆大成」第二期第二十卷所収。
- (4) 大谷篤藏氏編『近世大阪芸文叢談』一九七三年、所収。
- (5) 初編、享保十二年——四編、宝暦八年刊本。
- (6) 寛政三年刊本。
- (7) 宝暦十年刊本。
- (8) 第四章第一節、一四五頁。
- (9) 寛政八年刊本。
- (10) 明和九年刊本。
- (11) 享保十七年序写本。以下引用はすべて、本書の現存を御教示いただいた日野龍夫先生より拝借した原本中村幸彦博士蔵本の写真版による。これによって本稿を明霞士朗論として組み立てることができた。厚く御礼申し上げる。
- (12) 「日本詩話叢書」第六卷所収。なお樊紹述は文章が奇渋、解大紳は草書に巧みであったとされる。
- (13) 「漢語文典叢書」第一卷所収。
- (14) 同上。
- (15) 「日本儒林叢書」第一卷所収。
- (16) みずす版『荻生徂徠全集』第二卷所収。
- (17) 前掲、日野氏「入江若水伝資料」参照。
- (18) みずす版全集第十七卷所収。
- (19) 『護國雜誌』には「度量考を印行せらるゝ時、算に校合たのまるべしと竹溪云はれたれば、徂翁少々違ありても苦しか

- らずと云はれたれども、無理にすゝめて中根元珪に頼まれたり」というエピソードを伝える。また元珪の『皇和通歴』には徂徠が「序」を認めている（『徂徠集』巻九）。
- (20) 前掲『支那俗語文学史』第四章第三節一五九頁以下、および宗政五十緒氏「近世中期における白話小説家たち」ほか（『日本近世文苑の研究』一九七七年）
- (21) 日本思想大系『荻生徂徠』所収。
- (22) 享保十三年序刊本。
- (23) 宝暦二年刊本。
- (24) 宋元画の手本ではなく「親しく物に即きて筆を紙」（若冲居士寿藏碕銘）、『小雲棲稿』巻九「めようとした京都奇想派・伊藤若冲（一七一六——一八〇〇）の画論が想起される。大典と若冲には親交があった。
- (25) 「大阪の混沌社——江戸時代後半期の漢詩社——」（『斯文』第四八号、一九六七年）十四頁。
- (26) 享和二年刊本。
- (27) 安永七年刊本。
- (28) 宝暦十一年刊本。
- (29) 寛政四年刊本。
- (30) 「続日本隨筆大成」第四卷所収。
- (31) 寛政十一年刊本。なお拙稿「皆川淇園の周辺」（『宮城工業高等専門学校研究紀要』第十八号、一九八二年）一一〇頁をも参照されたい。

（付記）引用の漢文は適宜書き下し、新字体に改めた。